

## 「SCOOP！」★★★★

2016（平成28）年8月31日

鑑賞＜東宝試写室＞

監督・脚本：大根仁

原作映画：『盗写 1/250秒』（原田真人監督・脚本）

都城静（元スターカメラマン、中年パパラッチ）／福山雅治

行川野火（写真週刊誌「SCOOP！」の新人記者）／二階堂ふみ

横川定子（「SCOOP！」の副編集長）／吉田羊

馬場（「SCOOP！」の副編集長）／滝藤賢一

チャラ源（情報屋）／リリー・フランキー

小田部新造（若手議員）／斎藤工

2016年・日本映画・120分

配給／東宝

## ＜パパラッチvsナイトクロラー＞

パパラッチという言葉は、1997年8月31日にウェールズ公妃であるダイアナ妃と当時の恋人だった(?)大富豪・ドディ・アルファイドを乗せたメルセデス・ベンツS280がパリ市内のアルマ橋トンネル内で交通事故を起こし、ダイアナ妃が死亡したことに伴って、7人のパパラッチが重要参考人として拘束されたことによって一躍世界的に有名になった。また、Wikipediaによれば、「パパラッチ」という言葉はイタリア語で、「セレブリティをついまわし、彼らのプライベート写真などを撮影して生計を立てるカメラマン一般をさす俗称」と定義されている。

しかし、あなたはパパラッチは知っていても、「ナイトクロラー」という職業は知らないのでは?ナイトクロラーは夜の街を這い回り、事件・事故現場の刺激的な映像を撮影してテレビ局に高値で売りつけるというヤクザな仕事だが、そんな仕事があることを私が初めて知ったのは映画『ナイトクロラー』（14年）

（『シネマルーム36』167頁参照）を観た時だ。同作はメチャおもしろい映画だったが、世界的に大ヒットしたわけではないから、ナイトクロラーという言葉の定着はイマイチ・・・?

しかして本作は、吹石一恵との結婚で少しダウンしたものの、雑誌『anan』でキムタクこと木村拓哉と長い間抱かれた男のNo.1とNo.2を続けていた歌手兼俳優の福山雅治が「パパラッチ」と言うより「ナイトクロラー」役に挑戦したものだ。『ナイトクロラー』で見た主人公はあくまで事件・事故現場の刺激的な映像を撮影する報道カメラマンだったのに対し、本作で福山が扮した都城静はかつての花形カメラマンから今や「中年パパラッチ」に落ちぶれている男で、そのターゲットはもっぱら芸能人の下ネタを中心とした芸能スキャンダルばかりだから、レベルはもっと下・・・?それでも都城はあくまで中年パパラッチとしての誇りを持ち続けているようだが、『おやすみなさいを言いたくて』（13年）で見たような、報道カメラマン、戦場カメラマンの鑑のような女性（『シネマルーム35』220頁参照）に比べると、そんな男の生きざまは?

## ＜福山雅治と二階堂ふみの凸凹コンビの魅力をタップリと＞

次々と出演作が続く二階堂ふみの近時の活躍ぶりは突出しているが、『ほとりの朔子』（13年）（『シネマルーム32』115頁参照）で見た清楚な美しさ(?)だけではなく、『味園ユニバース』（15年）（『シネマルーム35』未掲載）や『ふきげんな過去』（16年）で見たヤンキー娘のような魅力もある。しかし、福山雅治が本作で無精ヒゲに、パーマヘア、アロハシャツに革ジャン姿に大変身して都城静役で登場したのと同じように、二階堂ふみも写真週刊誌「SCOOP！」の次期編集長(?)・横川定子(吉田羊)から否応なく都城とコンビを組まされる、ウブな新米記者・行川野火役で登場しい味を出している。

都城とコンビを組んだ最初の芸能人の下ネタ狙いの「出撃」で、野火が「マジ最低の男!」「マジ嫌な仕事!」と発言したのは当然。しかし、今ドキの若者の我慢強さの無さ、打たれ強さの無さを嘆いている私にとって、野火の我慢強さと打たれ強さは驚異的だ。私の事務所で1日目からこんなハードな体験をした事務員はきつと翌日から来なくなるだろうが、本作にみる野火の食いつき方はすごい。

「俺はこんな女を抱くのは絶対イヤだ」と言いつつ、「野火は処女か否か」で都城が横川と1万円を賭けた行為はよろしくないこと明らかだが、そんな賭けが成り立つ写真週刊誌「SCOOP！」を出版する職場は面白くかつ活気があるのは当然。もっとも、そんな賭けの結果はどうすれば客観的に判明するのかは難しいが、本作では賭けに負けた都城が横川に渡すべき1万円を野火に託すことになるから、そんなストーリーを含めてあらゆる意味で奇妙な福山雅治と二階堂ふみの凸凹コンビが織りなすスクープ獲得のためのストーリー展開(恋物語?)をたっぷり楽しみたい。

## ＜吉田羊が桃井かおりや大竹しのぶばりのいい味を!＞

近時大ヒットした週刊誌ネタとしては、『週刊文春』のそれが突出している。それはきつと、定子と馬場(滝藤賢一)の2人が「SCOOP！」の次期編集長の座を争っているのと同じような、特ダネ狙いの社内での「競争」があるからだろう。馬場はグラビアを仕切る副編集長で、相変わらず綴じ込みヘアヌード中心の販促を目指していたが、芸能と事件班を仕切る副編集長の定子は、もはやグラビアヌード中心では「SCOOP！」の売り上げ増は見込めないと考え、『週刊文春』が大ヒットを連発しているような、より刺激性の高い社会ネタを狙っているらしい。それらの記事に不可欠な写真撮影については、2人とも「くされ縁」のある都城を頼りにしていたが、本作ではその距離感とくされ縁の内容が面白いのでそれに注目!

殺人犯の顔写真を撮影するため、馬場がラガーマンに扮して厳戒態勢の横に突っ込んでいく姿は誇張気味で漫画的だが、これに近い撮影風景はきつと現実にもあるのだろう。本作で面白いのは、何かと定子と対立し議論ばかりし合う馬場が、この場面では都城からの無理難題を喜んで引き受けていることだ。本作のクライマックスは都城と後述するチャラ源(リリー・フランキー)との複雑な人間関係に由来するものだが、都城と馬場とのサブストーリーも男の郷愁を誘うもの(?)で面白い。

それ以上に本作で面白くかつ注目すべきは、職場では男顔負けの働きぶりを見せる一方で、都城との関係では、「アレレ・・・」と意外な一面を見せる定子役を吉田羊が見事に演じていることだ。吉田羊という女優を私は本作ではじめてじっくり観察したが、本作の定子役は若い頃の桃井かおりや大竹しのぶが演じれば、いかにもピッタリの役柄。本作のメイン女優はあくまで二階堂ふみだから、本作は福山雅治と二階堂ふみの凸凹コンビの突撃取材がメインで、2人の恋物語の進展(?)はサブになるが、そんなストーリー展開の中で、定子はいかなるスタンスに立ち、いかなる気持ちでそれを見守るの?そんな視点から、女優・吉田羊の本作における演技力をしっかり観察したい。

## ＜チャラ源の個性とリリー・フランキーの怪演に注目＞

今年7月26日に起きた相模原市の刃物による無差別大量殺傷事件や、8月31日に和歌山市の土木建設会社で起きた4名が死傷した拳銃発砲事件は日本中を震撼させたが、本作に登場するチャラ源はそれを彷彿させるものがある。芸能週刊誌の編集部はもちろん個々のカメラマンも、面白いネタをつかむために情報源が不可欠。チャラ源は都城とはさまざまなくされ縁を持つその情報屋だが、今は雀荘のマスターに収まり、細々と生計を立てているらしい。女同士と違って男同士の場合は長い友情が続くことが多いが、数々の思い出話をしながら、軽口を叩き合っている姿を見ると、この2人の友情は「Forever」と思えてしまう。しかし、それもこれも2人が健康で長生きすればの話だ。

都城が不規則かつ不健康な生活を送っていることは明らかだが、チャラ源はそれ以上に病的といわざるをえないから心配。もっとも、このチャラ源はあるシーンではボクサーもどきのビックリするような身体能力を見せるからそれにも注目だが、やはり身体的に病的であると同時に精神的にも少し異常気味だ。そんな男に拳銃を持たせたらヤバイことはわかりきっているが、本作後半からクライマックスにかけては、なぜかそんな物語が展開していくのでそれに注目!

なお、本作は『シン・ゴジラ』（16年）ほどではないが、後半のストーリー展開のネタバレ拡散を防止するため、一般試写会は行わないことになっているため、本作の評論はこの程度にとどめたい。

201

6（平成28）年9月2日記